



## イギリス科ニューズレター

No. 19 / Sept. 2011

東京大学教養学部地域文化研究学科イギリス分科

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 (8号館402号室)

Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)

Email: [british\[at\]mark\[jask.c.u-toyo.ac.jp\]](mailto:british[at]mark[jask.c.u-toyo.ac.jp])

Web Page: <http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp>



### 主任ご挨拶

アルヴィ宮本なほ子

例年、ニューズレターは、4月の新学期のことから始めるのですが、今年は、やはり3月からということになるでしょうか。2011年3月11日の東日本大震災では多くの方が亡くなられ、被災地では今も大変な生活が続いています。心よりお悔やみ、お見舞い申し上げますとともに、被災地の一刻も早い回復を祈念いたします。自然の猛威と原発事故の深刻な影響の長期化が明らかになる中、人文系の学問、文学研究に何ができるかあらためて問われますが、9.11の直後に一番読まれた英語の詩が Shelley の “Ozymandias” だったことを考えると、現場に遅れて／最後に／未来に到着する人々までを想定できるような想像力を伝える・研究する場が大学にあるのは意義のあることだと思います。

イギリス科では被災した学生はいまありませんでしたが、震災の影響で小さい工事を2つ行いました。地震によって書架の転倒防止金具が外れたため書架を壁に再度しっかり固定し、震災に乗じた盗難事件（しかしイギリス科の場合は未遂）のため破損した窓ガラスを入れ直しました。また、大学全体の卒業式の簡略化という方針をうけて、イギリス科の卒業パーティは延期しました。しかし、学事暦通りに始まった今学期、

3月の暗さを吹き飛ばすように、例年以上に活発な活動が大学の内外で繰り広げられ、夏休みを迎えました。近年にたく大人数の4年生（11名）は、就職活動、進学準備、留学準備、部活動にも励みつつ、第一回目の卒論中間発表を乗り切り、東大も参加している海外の大学のサマープログラム派遣制度では、イギリス科からは初めて1名、オックスフォードのサマープログラムに参加しました。期末試験が終わるとすぐに被災地にボランティア活動に駆け付けた学部生（2名）もいました。学科としてのクライマックスは、「夏の大パーティ」。3月にできなかった卒業パーティを、7月24日に中尾先生が幹事でイギリス科の研究室で行いました。イギリス科の恒例の卒論中間発表の打ち上げと歓送迎会も兼ねた「夏の大パーティ」、在校生がしっかり準備のお手伝いをし飾りつけをしたイギリス科のコモンルームで、社会人としての一步を踏み出した卒業生、卒論審査などにも来て下さったCPAS客員教授のオフォード先生他30名以上が集まりました。

今年度はいろいろな意味で変化の年でもあって、3月で教務補佐のアンジェラ・ダヴェンポートさんが退職され、4月に後任の城座沙蘭さんが着任されました。10月には斎藤兆史先生が本郷の教育学部に移られます。（ダヴェンポートさん、斎藤先生、長い間どうもあ

りがとうございました。新天地でのご活躍をお祈りします。）新任の先生はいらっしゃいませんが、10月にはロンドン大学のクレア・ウィルズ先生がイギリス科の客員教授として、学部・大学院共通の集中講義をされます。

イギリス科の研究室の運営の仕方も少し変わりました。助教のポストの削減でイギリス科は数年前から非常勤の教務補佐の体制になっていましたが、予算の削減で、今年度は教務補佐の時間数が前年度の6割以下になりました。それを補うため、4月から大学院生が5名週に1時間ずつ待機して、研究室の運営や学部生の質問などへの受け答えをしています。このような体制がいつまで続くのかわかりませんが、学部生にとっては、修士課程の院生や、本格的な留学の準備をしている博士課程の学生と日々接することができるというのは大きなメリットだと思います。

さらに、今年は、来年度からの教養学部後期課程の再編を前に、様々な準備を進めています。当分は現行のカリキュラムと新カリキュラムが併存しますが、10月から入ってくる2年生の内定生が現在の制度におけるイギリス科の最後の学生になります。（来年度の内定生は新生イギリス・コースの一期生になります。）大きな変化を迎える中で、やはり卒業生の方々のお力添えは有り難いと実感

しています。菅靖子先生には昨年に引き続き非常勤でご出講していただいておりますが、元教務補佐の藤田祐さんには、新しいイギリス・コースのことも念頭において、ダヴェンポートさんが雛型を作って下さったイギリス科のホームページのリニューアルを献身的にさせていただきました。

<http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp/>  
今年も秋にホームカミングデイが予定されています。大学の公式の行事も多々ありますが、イギリス科研究室も皆様を心よりお迎えいたします。どうぞお誘い合わせの上、イギリス科のコモンルームをお訪ねください。



### 新任のご挨拶

小川浩之

こんにちは。2010年度の冬学期にイギリス科に着任した小川浩之と申します。イギリス科では、教養学部後期課程で「イギリス社会構造論演習Ⅰ」「イギリス政治文化論演習Ⅰ」、大学院総合文化研究科で「ヨーロッパ地域システムⅠ」といった授業を担当しています。イギリス科の先生方や大学院生、学部生の皆さんと授業や卒業論文・修士論文の発表会などで議論をしたり、コモンルームで気軽にお話をしたりといった日々から、多くの知的刺激をいただいています。

私の専門は、第二次世界大戦後を中心とするイギリスの対外関係です。2006年に京都大学大学院法学研究科に提出した博士論文では、イギリスの欧州経済共同体（EEC）への第一回目の加盟申請（1961年）に向けた政策転換について扱いました。その

際、帝国およびコモンウェルス（英連邦）、英米関係、ヨーロッパ統合という、イギリス対外政策を支えるいわゆる「三つのサークル」に着目して分析を試みました。現在は、特にコモンウェルスに焦点を当て、その制度的特徴や、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、インド、マレーシアなど複数のコモンウェルス加盟国の政策、そしてコモンウェルス諸国間の人々の移動などに着目して研究を進めています。

大学院の修士課程以来、イギリスの対外関係を中心に研究をしてきましたが、実は、大学院入学時からイギリスに関心があったわけではありませんでした。当初は、主権国家と国際制度の関係について、より一般的、理論的な面から関心を持っていましたが、修士論文のテーマを選ぶために試行錯誤をするなかで、イギリスとヨーロッパ統合の関係のあり方が興味深いと考えるようになりました。

イギリスは、しばしばヨーロッパ統合への消極性を指摘されてきた国であり、現在でも、欧州単一通貨ユーロには参加していません。しかし他方で、1973年に欧州共同体（EC）に加盟して以来、今日まで、イギリスは一貫してヨーロッパ統合に参加しており、近年では、イギリスの貿易全体に占めるEU諸国の割合は50%以上に達しています。ヨーロッパ統合に対して一定の距離を保ちつつも、もはやそれなしではやっていけないというイギリスの立場やそうしたなかでの模索について考えることは、両者の関係はもちろん、主権国家と国際制度の関係について理解を深めるうえで、重要な示唆を与え

てくれるのではないかと考えて研究を始めました。

しかし、研究を進めるうちに、イギリスとヨーロッパ統合の関係に加えて、イギリスそのものやイギリス帝国、コモンウェルスの多面的な性質や複雑さに強く興味を引きつけられるようになりました。そして、留学先にイギリスのロンドン大学政治経済学院（LSE）の大学院を選んだこともあり、今となってはイギリスやコモンウェルスを中心に研究に取り組み、論文や著書を執筆するようになりました。

とはいえ、もともと現代の国際関係や国際関係の歴史全般に関心があり、移民や難民、民族紛争や内戦など、狭義の「国際関係」にとどまらない事象に目を向けることも大切だと考えています。これから、皆様のご指導を仰ぎつつ、イギリスやより広い英語圏の諸国・地域の対外関係や政治・社会などについて理解を深めることができるよう努力したいと思っています。どうぞよろしく願います。



### 新教務補佐からのご挨拶

城座沙蘭

今年4月、教務補佐に着任いたしました。私は国際基督教大学教養学部を卒業した後、駒場の言語情報科学専攻に進学しました。現在も同博士課程に籍を置く私にとって、イギリス科はおろか地域文化研究専攻も、これまで足を踏み入れることのない「未知の世界」でしたが、イギリス科前主任の斎藤兆史先生には指導教員として、元主任の山本史郎先生に

は論文の審査委員として修士課程からご指導いただき、現主任のアルヴィ宮本なほ子先生には英語部会のシンポジウムでのお手伝いをさせていただきなど、イギリス科の先生方にはこれまでたびたびお世話になって参りました。こうしたご縁から今年度、イギリス科で教務補佐を務める機会に恵まれ、完全なる「外様」でありながら、イギリス科の先生方、学生のみなさんに温かく迎え入れていただいたおかげで、予て噂に聞くイギリス科ファミリーの「アットホーム」な雰囲気にも早くも居心地の良さを感じております。

高校時代、学部時代の語学研修先はカナダ、学部での留学先はアメリカと、残念ながら私は、これまでイギリスとはほとんど縁がありませんでした。とはいえ、社会言語学や英語科教授法の基礎を学んだ学部時代から現在に至るまで、私の研究関心は常に英語という一つの言語を中心としてきました。今、「世界語」としての英語という言語現象を研究の対象として捉えるとき、英語がその地位を確立するに至る背景に、イギリスという国、その歴史や社会、文化の存在を無視することはできません。私の主要な研究テーマの一つである「World Englishes」という概念もまた、その思想的基盤をイギリス応用言語学の伝統に負うところが少なくないことが改めて認識され、イギリスに関する不勉強を恥じつつ、イギリス科に身を置くことのできるこの機会に少しずつでも理解を深めたいと思っております。

長らく格闘中の博士論文では、「英語は世界語であって、もはや英米の専有物ではない」という World Englishes 概念の根幹を成す考え方

を「脱英米語論」と捉え、これが日本における英語の位置づけや、英語教育の今後の方向性にどう関わるのかを考察しています。かつてイギリスやアメリカなど所謂「英語の本場」の文化に対する憧れが人びとを英語学習に向かわせる大きな原動力となってきた日本は（今も一部ではそうかもしれませんが）、しばしばその「母語話者至上主義」の偏狭性を批判されてきました。今では逆に、英米モデルから脱却して日本人らしい「日本英語」を確立すべし、という主張があちこちで聞かれ、これまで「教養 vs. 実用」「英文学 vs. 英会話」「受け身 vs. 発信」など様々に名前を変えて繰り返されてきた論争に、新たに「英米英語 vs. 国際英語」という構図が加えられています。以前にこのニューズレターで斎藤先生のご指摘になったことですが、「これからの英語の規範は母語話者ではなく、それを第二言語、外国語として使う我々である」という聞こえの良い主張は、結果的に英語のさらなる世界的拡散につながるという意味で「言語帝国主義」を助長するとの批判を免れません。これまでの英米モデル至上主義を反省しつつ、なおかつ、「英語帝国主義」とも言うべき思潮には十分に批判的であるために、どのような英語をどのように教え、学んでいくのか。この問いに対する私なりの解答を見つけることが、私の目下の、そして恐らくは今後も悩まされ続けるであろう最大の課題です。

教務補佐の業務引継の際、主任のアルヴィ先生や前任のダヴェンポートさんから、イギリス科の学生は皆とても仲が良く、またとてもよく勉強していると伺いました。教務補佐として勤務して半年、私もまた、学

生の仲の良さ、熱心に研究に取り組む姿勢に大いに刺激を受けています。先生方、学生のみなさんとの交わりの機会を与えられたことを感謝しつつ、教務補佐の任を全うし、自身の研究にも精進して参りたいと思っております。どうぞ宜しくお願いいたします。



7月に神戸で開催された国際コウリッジ学会のために来日中の2人の研究者がイギリス科を訪問されました。以下は、大学院生によるこの訪問と同学会参加の報告です。



アラン・ビューエル博士、アンドルー・ウォレン博士との交流

稲垣春樹

(地域文化研究専攻博士3年)

7月16日から18日にかけて神戸にて開催された国際コウリッジ学会にあわせて、トロント大学英文学部教授アラン・ビューエル博士(Dr. Alan Bewell)およびハーヴァード大学英文学部准教授アンドルー・ウォレン博士(Dr. Andrew Warren)が駒場を来訪した。イギリス科コモン・ルームを訪れたビューエル博士との会合は、博士が現在取り組んでいる研究テーマであるロマン主義時代の「移動性」(mobility)について概説したのち、学生と自由に対話する形で進められた。

植民地と本国を移動する疾病がロマン主義時代のイギリス文化に与えた影響を扱う前著の研究を発展させ、移動という行為そのものが近代世界において有した多様な意味を探求する博士の研究紹介は、講義と呼べる

ほどに充実した、刺激的なものであった。また当日は学部生、院生に加えて AIKOM の交換留学生も多数参加する大きな会となったが、学生ひとりひとりの自己紹介に対して熱心にメモを取りながら応答する博士との会話からは、その場にいた全員がそれぞれに自身の研究へのヒントを得ていたように思う。

アンドルー・ウォレン博士との会合は一時間半のセミナーの形で行われた。博士は 2009 年にロマン派詩人とオリエンタリズムについての博士論文を提出したばかりの気鋭の若手研究者であり、セミナーは英語圏の大学院で学ぶということ全般についてのフリートークという形で進められた。セミナーには英文学・歴史学を専攻しこれから修士論文、博士論文を書こうとする大学院生が多数参加し、具体的な研究スケジュールや研究のモチベーションを維持する方法、研究資金の獲得といった実際的なテーマについて、博士の体験談を交えながら活発な議論が行われた。

肩の凝らない打ち解けた雰囲気の中で行われた両博士との会話は、研究報告と質疑応答という普通の招聘研究者セミナーとはひと味違った、有意義なものであった。



### 国際コウルリッジ学会に

参加して

松本佳奈子

(地域文化研究専攻修士 1 年)

アルヴィ先生に誘っていただいて、7 月に神戸で開かれた国際コウルリッジ学会に行ってきました。「コウルリッジ、ロマン主義、東洋」というテーマで、各国から 100 人以上の先

生方と学生が集まる大きな学会でした。朝の 9 時から夜の 9 時まで発表、レクチャー、参加者の方々との交流と非常に充実した 3 日間でした。約 20 本のペーパーの発表と 6 つのレクチャーはどれも個性的な切り口で興味深い内容でした。

2 日目にアンドルー・ウォレン博士がコウルリッジの哲学とイスラム教の運命論との関係について発表され、アラン・ビューエル博士が“mobility”の概念についてド・クインシーの作品の分析を通して鮮やかなレクチャーをされました。その他にもサウジーとコウルリッジの影響関係についてのティム・フルフォード博士のレクチャーや、中国を訪れたトマス・マニングの手紙がチャールズ・ラムに与えた影響についてのフェリシテイ・ジェームズ博士の発表などおもしろい研究ばかりでした。

毎回発表の後の質疑応答では建設的な議論が交わされ、意見の交換を通じて新しい考えが生まれる場面が見られました。博士論文の構想を発表した大学院生にもたくさんのアドバイスを寄せられていました。専門的な内容を英語で説明されるので難しい部分もたくさんありましたが、最先端の研究成果を教えてもらっているのだと思って一生懸命聞きました。

緊張感のある発表の時間とは対照的にコーヒー休憩や食事の時間などは和気藹々とした雰囲気の中で、ディナーの時間には山内久明先生を初め参加された先生方のスピーチを聞くこともできました。刺激的で説得力のある発表のお手本と、本当に楽しそうに研究をされている様子を見ることができて貴重な経験になりました。

### ホームページ リニューアルの お知らせ

主任挨拶にもありましたとおり、元教務補佐の藤田祐さん、アンジェラ・ダヴェンポートさんのご尽力により、イギリス科ホームページが美しく生まれ変わりました。

<http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp/>

是非ご覧下さい。

### 2011 年度ホームカミングデー のお知らせ

来る 10 月 29 日（土）に本郷、駒場両キャンパスで、第 10 回ホームカミングデーが行われます。詳しくは

<http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp/hcd/>

をご覧ください。

イギリス科研究室（駒場キャンパス 8 号館 4 階 402）でも、例年通り、午後 4～6 時頃にかけて、お茶や軽食などを用意して卒業生の方々をお迎えいたします。事前予約は不要です。お問い合わせのうえ、お気軽に足をお運びください。皆様のお越しを心よりお待ちしております。詳細は、追ってイギリス科ホームページでお知らせいたします。

### 卒業生の方へお願い

お届けいただいているご連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)に変更などがおありの場合は、卒業生連絡専用アドレス [zigirisuka\[at mark\]ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:zigirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp) (at mark は@, 研究室アドレスとは異なります。ご注意ください)までお知らせ下さい。

### 2011 年度イギリス科運営委員

アルヴィ宮本なほ子 (主任)、西川杉子 (副主任)、小川浩之、後藤春美、小林宜子、斎藤兆史、中尾まさみ、山本史郎、城座沙蘭 (教務補佐)